

## 三教指帰成安注の写本三種について

佐藤義寛

大谷大学図書館に所蔵されている『三教指帰注集』（集成安注）については、これまでいくつかの研究を公にしてきた。一方、完本である大谷大学蔵本（以下「大谷本」と略称）以外にも、成安注の写本が存在し、今回、それら写本間の比較研究の結果について報告することとする。

「大谷本」以外の成安注の存在を指摘したのは、管見の及ぶところ上田正氏が最初である。上田氏はその著『玉篇反切総覧』『切韻逸文の研究』等において、「大谷本」成安注を資料として活用しており、その研究の結果、成安注の写本が「大谷本」のみではなく、もう一本存在することを指摘している。それが、天理図書館所蔵の建保六年の写本（以下「天理本」と略称）である。この「天理本」は、巻中・下のみで、それまで選者未詳、あるいは覚明注の一種であると考えられてきたものである。そのため、『空海全集』（筑摩書房）においても「大谷本」は成安注として紹介されているのに対し、「天理本」は「注釈書一覽」の項目ではなく、「写本」の項に有注本という注記を付して紹介されているだけであった。上田氏はこの「天理本」を「大谷本」と比較検討した結果、両者は同一のものであることに気づき、「玉篇逸文論考」と題する論文中で発表されている。

上田氏の指摘以降、研究者の多くは「大谷本」・「天理本」の両者を成安注の資料として用いてきた。ところが最近、太田次

男氏より、「尊経閣文庫に所蔵されている写本の一つが、あるいは成安注ではないか」とのご教示をいただき、太田氏の翻刻と「大谷本」を比較し、また尊経閣文庫において原本を拝見させていただき、「大谷本」と比較調査したところ、間違いなく成安注の写本であることが判明した。この尊経閣文庫蔵本（以下尊経閣本と略称）は巻下のみであり、『日本古典文学大系』では、藤原敦光作の勘注抄の写本であるとして紹介されており、太田氏が翻刻を発表された時点でも、覚明注の一種ないしは当時の有力寺院で行われた読み合わせではないかという程度の理解しかされていないものだった。

以下それぞれの写本の特色・異同等について述べていくこととする。まずそれぞれの写本の書写された年次等についてみてみる。「大谷本」は、その奥書きから厳寛という人物によって長承二年（一一三三年）から三年の間に書写されたものであることが判明している。また厳寛という人物は、『性霊集』の補完者である南岳房齊暹の弟子である。（詳しい考証は略す）またこの南岳房については上巻本の巻頭・巻末に書き込みがあり、それによると成安注の最初にある序文は、施注者成安の草案を元に南岳房が完成させたものであるということになり、この序文に手を加えるというような行為は施注者本人に無断で行ったとは考えられず、当然のこととして成安と南岳房の間にも子弟関係に近いものがあつたのではないかと推察される。このような成安・南岳房・厳寛という三者の関係から考えても、また成安注の成立——寛治二年（一一〇八）——より四十数年ほどしかたっていない時点での写本であることから、「大谷本」は成安注本来の姿を良く残したものであると思われる。

余談になるが、これまで報告されている『三教指帰』の写本のうち、空海の真蹟であると言われるものを除いて、もっとも古いものは天理図書館所蔵の仁平四年（一一五四年）のものであり、この点からも長承二・三年の奥書きを持つ「大谷本」は非常に価値の高いものであるといえる。

次に「天理本」は、忠尊という人物（詳細未詳）による建保六年（一一二八年）の写本である。この「天理本」は巻中・下を合わせた一帖のみで、上巻部分が欠けている。「大谷本」との著しい違いとして、次の二つの点を指摘することができる。第一に、「大谷本」は『三教指帰』本文注文ともに同じ大きな文字で記され、注文の巻頭には必ず「注云」の二字が冠されている。一方、「天理本」の方は、注文が小字二行による割注形式をとり、注文の頭に「注云」の二字を冠することもしない。第二の相違点は、これは非常に重要な問題であるが、「大谷本」に存在する頭注・脚注が、「天理本」には一切存在しないという点である。「天理本」を書写した忠尊なる人物が見た成安注に、初めから頭注・脚注が存在しなかったものか、あるいはあえて書写しなかったものか明らかではないが、いずれにしろ「大谷本」とは異なる性格を持った写本である。

次に「尊経閣本」は、先にも述べたように太田次男氏に翻刻及び研究があり、以下それに基づいて述べることにする。この「尊経閣本」には、仁和寺心蓮院の朱印があり、本来卷子本であったものを江戸時代になって折り本に改装したものである。この改装時の識語が巻末にあるだけで、書写の年次を示すような記事は見られず、太田氏は、その書写の字体等から鎌倉初期のものであるとされている。「尊経閣本」と「大谷本」とを比較したところ、

「天理本」とは違って、両者は非常に近いものであることが判明した。注釈の形態も両者同一であり、頭注・脚注についてもほぼ同じ位置に書き込まれており、両者に使用されている文字についても非常に良く合致している。ただ「尊経閣本」には書写の際に異体字を見誤ったと思われる部分が少なからず見られ、それらの例からあるいは「大谷本」よりもいくらか後の時代のものではないかと思われる。

次に頭注・脚注について、両者の下巻部分総てを比較したところ、「尊経閣本」にあつて、「大谷本」に存在しないものが二例見られるが、それらは他の部分とは異なって朱筆によるものであり、「尊経閣本」書写時点での追加である可能性が高いものと考えられる。一方、「大谷本」にのみ存在する頭・脚注は一例もない。ただ、太田氏の翻刻中に挙げられていないものが一例だけあるが、先日「尊経閣本」を実際に調査したところ、該当する脚注部分に大きな虫食いがあり、その部分に「大谷本」と同様の数字を読み取ることができ、本来「尊経閣本」にも同文の脚注があったものと思われる。

ここで一つ問題となるのは、この成安注の頭注・脚注はいったい誰の手によるものであるかということである。これは、各写本の関係とも関連し、非常に重要な問題である。こうした写本間の関係究明が今後の研究課題となろう。